

なぜベラルーシ語は危機言語¹なのか —国勢調査からみたベラルーシ共和国の言語状況—

清沢 紫織

[Резюме]

Почему белорусский язык – исчезающий язык?
—Языковая ситуация в Беларуси из анализа данных переписей населения—

КИЁСАВА Сиори

В настоящее время, несмотря на то, что белорусский язык является государственным языком в Республике Беларусь, ЮНЕСКО считает белорусский язык исчезающим языком и классифицирует его как «уязвимый язык (vulnerable language)».

В данном докладе на основании данных переписей населения 1959г. - 2009г. анализировались состояние и перспективы развития языковой ситуации в Беларуси, и в частности, роль белорусского языка в обществе.

Из анализа выяснились следующие факты: большинство жителей Беларуси используют в повседневной жизни русский язык: постепенно белорусский язык утрачивает функцию символа белорусской национальности, т.е. белорусы не считают его своим «родным языком», чего не было даже во времена Советского союза. Из этого следует, что белорусский язык перестаёт быть символом белорусской национальности, не говоря уже о медиуме коммуникации.

Кроме того: положение белорусского языка сравнительно устойчиво в сельских регионах страны, но сельское население не составляет большей части населения Беларуси, наоборот, его численность резко уменьшается, и даже в сельской местности в повседневном общении жители постепенно переходят на русский язык. Столичный город Минск – политический и экономический центр Республики Беларусь, в котором сосредоточена 5-ая часть всего населения страны – является с точки зрения языка самым русифицированным местом в Республике Беларусь. Очевидно, что при таких обстоятельствах позиции белорусского языка достаточно слабые.

キーワード：ベラルーシ語、ロシア語、国家語、危機言語、UNESCO

はじめに

ベラルーシ語はインド・ヨーロッパ語族のスラヴ語派に属し、ロシア語、ウクライナ語と共に東スラヴ語のグループの一角を担う言語である²。現在のベラルーシ共和国は、法的に見れば旧ソ連圏の独立国の中で唯一、基幹民族語（ベラルーシの場合ベラルーシ語）に加えてかつての支配言語であるロシア語にも国家語³の地位を与える二言語体制をとっている国である⁴。しかし国内にロシア系住民を多く抱えているのかといえばそうでもなく、ロシア人は8%を占めるに過ぎない一方でベラルーシ人は全人口の実に84%占めている⁵。さらにベラルーシ国内でベラルーシ人とロシア人の民族的な対立が生じたという話も聞いたことがない。この点では同じ二言語体制といっても国内に政治的火種としてフランス語系住民を抱えるカナダなどとは異なった状況にある。また、ベラルーシ共和国の言語法には「社会生活のあらゆる領域においてベラルーシ語とロシア語が発展し機能することを国が全面的に保障する」という旨が謳われており⁶、どちらかの言語を意図的に優遇するといった姿勢は取られていない。客観的に見れば、ベラルーシ語を取り巻くベラルーシ国内の状況は少なくともベラルーシ語の発展を妨げるものではないように思われる。しかし、ベラルーシ語は現在ロシア語の圧倒的な優勢さの下にベラルーシ国内でその勢力を弱めており、今日 UNESCO によって危機言語の1つとしてその名をリストアップされるに至っている。

本稿は、このようにベラルーシ語がベラルーシ共和国の国家語の1つであるにも拘らず現在 UNESCO によって危機言語と認定されている事実の詳細を確認した上で、ベラルーシ語がベラルーシ共和国の実際の言語状況においていかに危機的な状況にあるのかを国勢調査のデータ分析から明らかにするものである。

今日、旧ソ連地域の各独立国では基幹民族語の保護・発展とかつての支配言語であるロシア語の政治的な扱いが言語政策の焦眉の課題となっている。カザフスタンやキルギスのように基幹民族語に国家語の地位を与えつつもロシア語には別立てで公用語という地位を付与している場合もあれば⁷、エストニアやラトヴィア、ウクライナのようにロシア語に公的な地位を与えるかどうかを巡って激しい論争が起こっている国もある⁸。そうした中でベラルーシはいち早くロシア語を基幹民族語と同じ国家語という法的地位で扱うという興味深い政策を採用した国⁹であり、そのベラルーシで基幹民族語のベラルーシ語がロシア語に脅かされ危機言語となっているという状況は他の旧ソ連諸国の言語政策を考える上でも興味深い示唆を与えてくれるであろう。

1. 先行研究の検討、研究の方法、研究意義

1.1 先行研究の検討

ベラルーシの言語問題はこれまで、とりわけソ連の民族政策との関連やベラルーシ人の民族アイデンティティの形成、ベラルーシナショナリズムとの関連から大きな関心を集めてきた。ソ連圏全体の言語問題と民族政策の問題からベラルーシの事例に触れた研究としては、塩川(2004)、Fouse(2000)、B. ナハイロ、V. スヴォボダ(1992)などがある。また、ベラルーシ人の民族アイデンティティの形成やベラルーシナショナリズムとの関わりからベラルーシの言語問題を論じた研究としては服部(2004a)、Ioffe(2003)、Goujon(1999)、黒田(1999)、Мечковская(1994)、Dingley(1989)などが上げられる。この他にもベラルーシ語をめぐる言語

状況を通時的に考察した山本(2005)、Коряков(2002)などもベラルーシの言語問題を考える上で大いに参考になる。また、危機言語としてのベラルーシ語に焦点を当てた数少ない研究としては J. J. Smolicz, R. Radzik.(2004) が上げられる。最新の研究としては、現在のベラルーシの言語状況を教育やマスメディア、出版の状況なども含め広く概観した И.Э.Федотова, А.В.Санникова(2010) や独自のアンケート調査からベラルーシ人の実際の言語使用と言語意識を詳細に検討した Г.Хентшель, Б.Киттель.(2011) などがある。

これらのどの先行研究においても、ベラルーシ語は様々な側面でロシア語の優勢な使用の下に危機的な状況に置かれている事が言及されているが、ベラルーシ語が国際的に危機言語として認定されているという事実に具体的に触れたものやそういった状況が他の旧ソ連地域と比較してどう特徴づけられるのかに言及した研究はまだ少ない。また、統計データを用いてベラルーシの言語状況を詳細に検討したものとしては服部(2002)、Steven L. Guthier(1977a) (1977b) などがあるが、最新の 2009 年の国勢調査のデータも反映させて詳しく考察・検討を行っている研究はまだみられない。以上のような先行研究の状況を踏まえた上で、本研究ではまず、UNESCO による危機言語認定においてベラルーシ語に対する評価づけが具体的にどうなっているのかを確認し、そうしたベラルーシの言語状況が旧ソ連圏というコンテキストの中でどのような特徴を持つのか考察する。その上で、実際にベラルーシ共和国の言語状況をソ連時代から最新の 2009 年の国勢調査のデータも含めて分析・考察し、ベラルーシ語がいかに危機的な状況にあるのかを明らかにする。

1.2. 論文の方法

まず UNESCO による危機言語認定については、1996 年、2001 年、2010 年に UNESCO によって出版された危機言語地図を参照し、UNESCO が定める言語の危機度に関する評価尺度およびベラルーシ語の位置づけを確認する。さらにこうしたベラルーシの現状を旧ソ連圏の他の国や地域と比較し、ベラルーシの言語状況がどのような特殊性あるいは他地域との類似点を有しているのか考察する。

また、国勢調査のデータ分析については、第 2 次世界大戦以降に実施された 1959 年、1970 年、1979 年、1989 年のソ連時代の国勢調査のデータ¹⁰および独立後に実施された 1999 年、2009 年のベラルーシ共和国国勢調査のデータの中から民族と言語に関する調査データを分析資料として用いる。分析の視点としては、ベラルーシ人の母語意識（何語を母語と見なしているか）、ベラルーシ国民の母語意識と家庭言語の状況、都市・農村別、地域別の言語状況を重点的に検討する。なお家庭言語に関しては、独立後の 1999 年・2009 年の国勢調査から新たに加わった調査項目であるため、ソ連時代のデータは存在しない。そのため分析方法としては独立後の 1999 年・2009 年のデータを特に詳細に分析する。

ただし、国勢調査のデータは基本的に全て自己申告に基づくものであり、実際の言語状況を具に反映したものというよりは国民自身が「何語を母語と見なしているか」、「普段何語で話していると考えているか」といった意識を反映したものである。つまり国勢調査が示すのは実際の言語状況のほんの一側面にすぎない。しかし国勢調査はベラルーシ共和国の国民全員を対象に行われた調査であり、国民の言語意識に関して最も包括的な情報を与えてくれる貴重な資料である。また、さらに詳細な研究の基本資料としても、他国の言語状況との比較

材料としても検討する価値は高いと筆者は考える¹¹。

1.3. 研究意義

本研究が対象とするベラルーシ共和国は旧ソ連地域において以下のような独自性を持った個別事例として研究意義があると筆者は考えている。

人口学的要素 …… 基幹民族であるベラルーシ人が全人口の84%と高い割合を占めている。

法的要素 …… 旧ソ連圏の独立国の中で唯一、憲法及び言語法によって基幹民族語のベラルーシ語に加えてロシア語に対しても国家語という高い地位を付与している。

言語学的要素 …… 基幹民族語であるベラルーシ語がかつての支配言語であるロシア語と同じ東スラヴ語のグループに属し、両言語の言語学的な距離が非常に近い。

政治・経済的要素 …… 国家統合を模索するなど政治的にロシアとの関係を非常に重視している。また近年、関税同盟によって共通の経済圏構築に取り組むなど経済的にもロシアとの関係が密接である。

これら四点に集約される特徴からは、現在のベラルーシ共和国が民族的にはベラルーシ人の国家でありながらもあらゆる面でロシア、ロシア語との密接な関係の中にあるという独自性が見えてくる。特に基幹民族語に加えてロシア語に対しても国家語という地位を付与しているという点はベラルーシの言語状況の独自さを旧ソ連圏で際立たせる非常に興味深い特徴である。

しかしまた、ベラルーシは単に特殊な個別事例であるというだけに留まらず旧ソ連圏の他の独立諸国との比較においても興味深い事例である。例えば基幹民族語がかつての支配言語であるロシア語と言語学的に近い距離にあるという点は、中央アジア諸国とは対照的である一方、ウクライナとは非常に近い条件を言語状況に与えている。また政治・経済的な点では中央アジアのカザフスタンも旧ソ連圏においてはロシアと特に密接な関係にある。このようにベラルーシの言語状況は旧ソ連圏において独自の性格を有する興味深い個別事例であると同時に旧ソ連圏の他の独立諸国の言語状況との比較研究においても示唆に富んだ事例であり、研究意義は高いと筆者は考える。

2. UNESCOによるベラルーシ語の危機言語認定

2.1. UNESCOによる危機言語地図

UNESCOによる危機言語地図(Atlas of World's languages in Danger of Disappearing)は、1991年にUNESCOによって立ち上げられた「危機言語レッドブックプロジェクト」の一環として1996年に初版が出版されたものである。その後2度の改訂が重ねられ、現在までに1996年版、2001年版、2010年版の合計3つの版が出版されている。版を重ねるたびに言語の危機度に対する評価尺度の見直しと新たに危機的な状況にあることの判明した言語の追加が行

なぜベラルーシ語は危機言語なのか（清沢紫織）

われている。以下にそれぞれの版における危機言語の評価尺度及びベラルーシ語の位置づけを示す。また最新の2010年版については比較のために旧ソ連地域の他の独立国の国家語及びロシア連邦内の構成共和国の国家語の位置づけも載せた。合わせて各独立国及びロシア連邦内の構成共和国の国家語の一覧も付した。

表1 UNESCOによる言語の危機度に関する評価尺度（1996年版）¹²

1	消滅の危機に瀕している (In danger of disappearing)	子供たちの大半がもう学習しなくなっている上に、最年少の話者が中年層へと移行しつつある大人である。多くの人々が当該言語の知識を十分に持っていない。	※ ベラルーシ語は含まれず
2	瀕死の状態である (Moribund)	ほんの一握りの話者しか残っておらず、大半は非常に高齢。	
3	消滅してしまっている (Extinct)	話者が残っていない。	

※ 言語の危機度に対するナンバリングは筆者による。数字が大きくなるほど当該言語の危機度は高くなっている（以下、表2及び表3においても同じ）

表2 UNESCOによる言語の危機度に関する評価尺度（2001年版）¹³

1	潜在的に消滅の危機に瀕している (Potentially endangered)	当該言語を学ぶ子供たちの数が減少している。	← ベラルーシ語
2	消滅の危機に瀕している (Endangered)	最年少話者が青年層である。	
3	危機状態が深刻である (Seriously endangered)	最年少話者が中年層に達している、あるいはそれを越えている。	
4	瀕死の状態である (Moribund)	僅かな高齢の話者しか残っていない。	
5	消滅してしまっている (Extinct)	話者が残っていない。	

表3 UNESCOによる言語の危機度に関する評価尺度（2010年版）¹⁴

0	安全である (Safe)	全世代によって当該言語が話されており、世代間の継承も妨げられていない（地図上には示されない）。	アゼルバイジャン語、アルメニア語、ウクライナ語、ウズベク語、エストニア語、カザフ語、キルギス語、タジク語、タタール語、トルクメン語、モルダヴィア語、ラトヴィア語、リトアニア語、ロシア語
1	危うい状況にある (Vulnerable)	大多数の、しかし全員ではない、子供たちないし家族が彼らの両親の言語を第一言語として話しているものの、両親や祖父母と接する家庭内などの特定の社会領域に限られている。	← ベラルーシ語 アディゲ語、イングーシ語、オセット語、カバルディン・チェルケス語 ¹⁵ 、カラチャイ・バルカル語 ¹⁶ 、サハ語、チュチェン語、チュヴァシ語、トゥヴァ語、バシキール語
2	危機状態が確実である (Definitely endangered)	当該言語を家庭内で子供たちがもはや母語として習得しなくなっており、最年少の話者は親世代である。この段階では両親は当該言語によって子供たちに話しかけるものの、子供たちは概して当該言語で答えない。	アバザ語、ウドムルト語、エルジャ語 ¹⁷ 、カルムイク語、コミ語、ノガイ語、ハカス語、東マリ語 ¹⁸ 、ブリヤート語、南アルタイ語 ¹⁹ 、モクシャ語 ²⁰

3	厳しい危機に瀕している (Severely endangered)	当該言語は祖父母・年配世代のみによって話されている。親世代はまだ当該言語を理解しうるが同じ親世代同士や子世代に対しては使用しない。	北アルタイ語 ²¹ 、西マリ語 ²²
4	危篤状態にある (Critically endangered)	最年少の話者が祖父母・年配世代であり、当該言語は日常のやり取りには使用されない。そうした年配層の人々は当該言語の一部を覚えているものの、当該言語によって話す人々がほとんど残っていないため、定期的な使用しない	
5	消滅してしまっている (Extinct)	当該言語を話せるあるいは覚えている者が残っていない。	

表4 旧ソ連圏の独立国の国家語²³

国名	国家語
アゼルバイジャン共和国	アゼルバイジャン語
アルメニア共和国	アルメニア語
ウクライナ	ウクライナ語
ウズベキスタン共和国	ウズベク語
エストニア共和国	エストニア語
カザフスタン共和国	カザフ語
キルギス共和国	キルギス語
グルジア共和国	グルジア語
タジキスタン共和国	タジク語
トルクメニスタン共和国	トルクメン語
ベラルーシ共和国	ベラルーシ語、ロシア語
モルドバ共和国	モルドヴィア語
ラトヴィア共和国	ラトヴィア語
リトアニア共和国	リトアニア語
ロシア連邦	ロシア語

表5 ロシア連邦の構成共和国の国家語²⁴

共和国名	国家語
アディグ共和国	ロシア語、アディグ語
アルタイ共和国	アルタイ語、ロシア語
イングーシ共和国	イングーシ語、ロシア語
ウドムルト共和国	ロシア語、ウドムルト語
カバルダ・バルカル共和国	カバルダ・バルカル共和国国民の言語
カラチャイ・チェルケス共和国	アバザ語、カラチャイ語、ノガイ語、ロシア語、チェルケス語
カルムイク共和国	カルムイク語、ロシア語
カレリア共和国	ロシア語
北オセチア共和国	オセット語、ロシア語
コミ共和国	コミ語、ロシア語
サハ共和国	サハ語、ロシア語
ダゲスタン共和国	ロシア語、ダゲスタン国民の言語
タタールスタン共和国	タタール語、ロシア語
チェチェン共和国	ロシア語、チェチェン語
チュヴァシ共和国	チュヴァシ語、ロシア語
トゥヴァ共和国	トゥヴァ語、ロシア語
ハカス共和国	ロシア語、ハカス語
バシコルトスタン共和国	バシキール語、ロシア語
ブリヤート共和国	ブリヤート語、ロシア語
マリ・エル共和国	マリ語(山地マリ語と牧地マリ語)、ロシア語
モルドヴィア共和国	ロシア語、モルドヴィア語(モクシャ語とエルジャ語)

※ 言語名及び各言語を列挙した順番は各共和国の言語法（ウドムルト共和国、カレリア共和国、北オセチア共和国、ダゲスタン共和国については憲法）に一致する。民族語より先にロシア語を挙げている共和国もみられる。

2.2. ベラルーシ語の位置づけ及び他の旧ソ連地域との比較

ベラルーシ語は 1996 年の初版では危機言語として認定されていないが、2001 年版では「潜在的に消滅の危機に瀕している (Potentially endangered)」、2010 年版では「危うい状況にある (Vulnerable)」という評価付けで、危機言語地図に掲載されている。特に 2010 年版においては、各危機言語に関する記述の中でベラルーシ語の状況は以下のように指摘されている。

東スラヴ語のうち危機的な状況にないと分類されているのはロシア語とウクライナ語の 2 言語のみである。すなわちベラルーシ語は独立国家の公的な言語であるにも拘わらず、広範なロシア語の使用を根拠に危うい状況 (vulnerable) にあるとみなされている。²⁵

（下線は筆者）

表 3 及び表 4 から明らかなように現在独立国家となっている旧ソ連構成共和国のうちで、国家語の地位にある基幹民族語が UNESCO によって危機言語と認定されているのはベラルーシ共和国のみである。

しかし、表 5 に示したロシア連邦内の構成共和国の国家語にまで視野を広げるとベラルーシと類似する言語状況がみられる。まず 1 点目の類似点として、ほとんどのロシア連邦の構成共和国はベラルーシ共和国と同じくロシア語と基幹民族の言語の両方を国家語として定めている²⁶。2 点目として、そうしたロシア連邦の構成共和国において国家語の地位にある民族語の多くは UNESCO によって危機言語と認定されている（表 3 参照）²⁷。この 2 点において、ベラルーシ共和国の言語状況は旧ソ連圏という文脈においては独立諸国の言語状況よりもロシア連邦内の構成共和国の言語状況と相対的に似た状況にあるのではないかと考えられる。

もちろん、独立国家であるベラルーシ共和国における「国家語」とロシア連邦内の構成共和国の「国家語」の法的地位を簡単に同等のものとして扱うことはできない。独立国家という後ろ盾を持ったベラルーシ語の「国家語」としての地位の方がロシア連邦内の構成共和国が民族語に与えている「国家語」の地位よりもずっと盤石なものであるはずである。しかし、そういった強い後ろ盾を持っているはずのベラルーシ語がロシア連邦内に留まっている構成共和国の民族語と並んで危機言語に認定されているという事態は、逆にベラルーシ語の国家語としての地位がいかに形骸化しているか、ベラルーシ語が置かれている危機的な状況がいかに困難なものかを物語っているともいえるだろう。

3. 国勢調査のデータ分析

本章では、国勢調査のデータ分析から第 2 次世界大戦以降のベラルーシの言語状況、特に独立後の状況を重点的に明らかにする。ソ連時代～1999 年の国勢調査のデータに関しては服部 (2002) が詳細な分析と考察を行っているが、本研究はその分析・考察を参考にしつつ、新たに発表された最新の 2009 年のデータも含めたうえで改めてベラルーシの言語状況の分析を試みることにする。

3.1. 国勢調査における民族と言語に関する調査

まず、国勢調査のデータ分析に先立ち、本節ではソ連時代の国勢調査（今回検討する第2次世界大戦以降のもの）および独立後のベラルーシ共和国の国勢調査において民族と言語に関する調査がどのように行われたかを整理する。

ソ連時代の国勢調査では、住民に対し「民族」（национальность）と「母語」（родной язык）が毎回尋ねられている。1970年以降の国勢調査からは、この他に「第二言語」（「自由に操れるソ連邦諸民族のその他の言語」）も調査項目に加わる²⁸。注意が必要なのは、これらはいずれも回答者の自己申告によるものであった点、「民族」に関しては●●系××人といった折衷的な回答はできず異なる民族の両親を持つ場合にはどちらか一方の民族を一つ選択して回答していた点、「母語」に関しても仮に幼少期から家庭で複数の言語を用いる環境にあった場合でも複数回答することはできなかった点である²⁹。

独立後の国勢調査では、ソ連時代の「民族」「母語」「第二言語」（1970年以降）に加えて新たに「家庭言語」すなわち「普段家庭で使用している言語は何か」が調査されている。これらもソ連時代同様全て自己申告であり（ただし子供の言語状況に関しては親が判断し申告するとされている）、1999年及び2009年の調査結果を見る限り、「民族」に関する折衷的な回答と言語に関する複数回答も基本的には想定されていない³⁰。また、「母語」に関しては、回答者が任意の言語を特定するのが困難な場合は「幼少期に最初に身につけた言語」とするとされている。また、2009年の国勢調査の調査方法に関しては、「第二言語」すなわち「自由に操れるその他の言語」の定義についての解説があり、「自由に操れる」とは話すこと・書くことの両方ができる、あるいはそのどちらかとされており、「その他」とは母語と家庭言語以外を指すと説明されている³¹。

3.2. ベラルーシ人の母語意識

3.2.1. 「母語」（родной язык）の意味について

一般的に母語といえば人間が幼少期から自然に習得した言語で最も自由に使いこなせる言語、すなわち第一言語を指す場合が多いが、ソ連時代の国勢調査で盛んに問われた「母語」（родной язык）の意味するところはやや異なったものであったということが知られている。調査者側が「母語」をどう定義してきたかに関しては、渋谷（2007）がソ連時代の国勢調査における「母語」の定義を詳細に検討した上で、「ソ連時代の国勢調査では、各人にとって何語が母語なのかということは、まずは主観にゆだねられ（自分が母語とみなすもの）、そのうえで若干の目安（最もよく身につけている、普段家庭で使用している言語）が示されてきた」とまとめている³²。また、回答者側が「母語」をどう捉えていたかに関しては、服部（2004）がウクライナの国勢調査における「民族」と「言語」の項目を詳細に検討したドミニク・アレルの研究の中からまとめている。アレルの主張するところは以下のとおりである。

ソ連時代には、各個人はいずれかの民族に属し、各民族は独自の言語を持っているということが盛んにメディアによって想起させられていた。こうした状況下では、母語（родной язык）が自身の民族的な帰属と結び付けて捉えられるという事態がごく自然に生じていた。

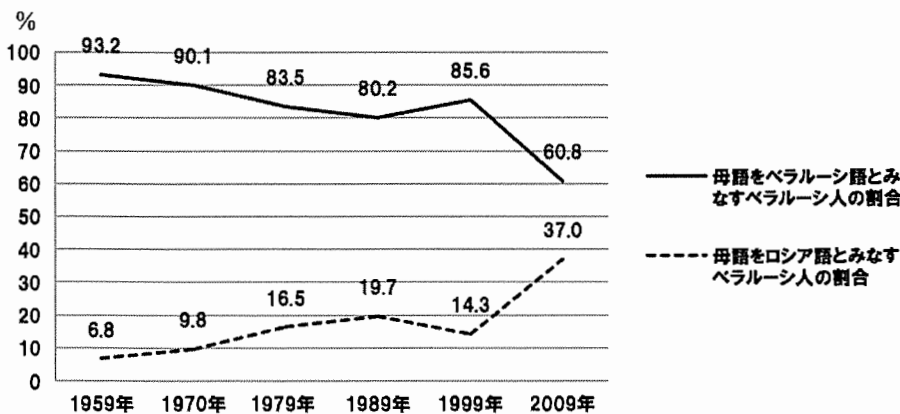
ソ連時代の国勢調査における母語の質問項目は、その言語が流暢に操れるかは考慮されず、民族的属性の再確認としての意味合いをもっていたと広く理解されている。³³

この点は、ソ連時代の民族学者 V. コズロフも「母語」を回答する際、個々の回答者は「母語」の定義に通じているわけではないため、多くの回答者は「母語」を自己の帰属民族に結び付けて回答していた」と指摘している³⁴。つまり、ソ連時代、「母語」(родной язык) は国勢調査の回答者にとって第一言語というよりは「自民族の言語」という意味合いで捉えられる傾向にあったのであり、この点はソ連時代の国勢調査のデータを検討する上で注意が必要である。またソ連時代に形成されたこの「母語」(родной язык) 概念は独立後の国勢調査においても人々の回答に影響を及ぼしていただろうと考えられるため、独立後の国勢調査のデータの検討においても注意が必要であろう。

3.2.2. ベラルーシ人の母語意識の推移

前節でみたように「母語」(родной язык) は旧ソ連圏においては「自民族の言語」という意味合いで捉えられる傾向にあったとされるが、ベラルーシ人は果たして何語を「母語」(родной язык) であると見なしてきたのだろうか。ベラルーシ人の母語意識の推移を国勢調査の「母語」調査よりまとめると以下のグラフのようになる。

図1 ベラルーシ人の母語意識の推移³⁵



このグラフは調査年毎のベラルーシ国内のベラルーシ人の数（正確にはベラルーシ人であると回答した人数）を100とし、その中でベラルーシ語を「母語」とみなすベラルーシ人の割合とロシア語を「母語」とみなすベラルーシ人の割合の変化を表したものである³⁶。

まず大きな傾向としてベラルーシ人が「母語」と見なす言語が戦後からほぼ一貫してベラルーシ語からロシア語に置き換わりつつあるということが指摘できる。唯一1989年～1999年の10年間はベラルーシ語を「母語」として意識するベラルーシ人が増加しているが、恐らくこれは独立後の1990年代前半にとられたベラルーシ化政策³⁷の影響であろう。

このグラフにみられる最も衝撃的な変化は1999年～2009年の10年間の変化である。こ

の10年間でベラルーシ語を「母語」とであると意識するベラルーシ人の割合は実に85.6%から60.8%にまで減少している。グラフからも明らかな通り、ベラルーシ語を「母語」とであると意識するベラルーシ人の割合の低下自体はソ連時代にも進行していたことである。しかし、ソ連時代は1959年～1989年の30年間で13ポイントの低下であったのに対し、1999年～2009年はわずか10年の間に24.8ポイントも低下している。この減少速度はソ連時代の約6倍であり、2009年時点でベラルーシ語を「母語」とみなすベラルーシ人の割合は過去50年で最も低い値を記録している。

では、ベラルーシ人の母語意識においてベラルーシ語が選ばれなくなりつつあるこの状況が意味することは一体何なのだろうか。まず第一に、ベラルーシ人にとっての「母語」の意味が旧ソ連圏で主流の「自民族の言語」という意味合いを失い、一般的な「第一言語」の意味合いを帯びるものに変化しつつあると考えられる³⁸。第二に、ベラルーシ人にとって「ベラルーシ語を「母語」とすること」は「ベラルーシ人であること」の必要条件ではなくなりつつあると考えられる。このうち二点目に関しては、ソ連時代から「母語」という単語が「自民族の言語」という意味合いを帯びていたということを考慮するならば、ベラルーシ人にとってベラルーシ語は民族アイデンティティを象徴するものとして意識されなくなりつつあると言い換えることができるだろう。ベラルーシ語はこれまでの先行研究において、実際にコミュニケーションをはかるといふ機能を社会で担っていない代わりに（実際の言語状況に関しては次節以降で確認する）、ベラルーシ民族の象徴として機能しているという主張がなされてきていた³⁹。しかし、今回の分析結果からはそういった民族の象徴という機能すらベラルーシ語は担えなくなりつつあるという、深刻な現状が見えてきたといえるのではないだろうか。もっとも、これは国勢調査という限られたデータから考察されることであり、ベラルーシ語がどのような象徴性を帯びているかはさらなる調査が必要であることは言うまでもないだろう。先行研究においては、ベラルーシ人が言語を民族の属性として重視していないことは社会学的に裏付けられてきたとの指摘も存在する⁴⁰。しかし、そうした実態が既に存在していたにせよ、最新の2009年のデータを含めた今回の分析からはそれが近年ますます顕著になってきているという傾向が読み取れるだろう。

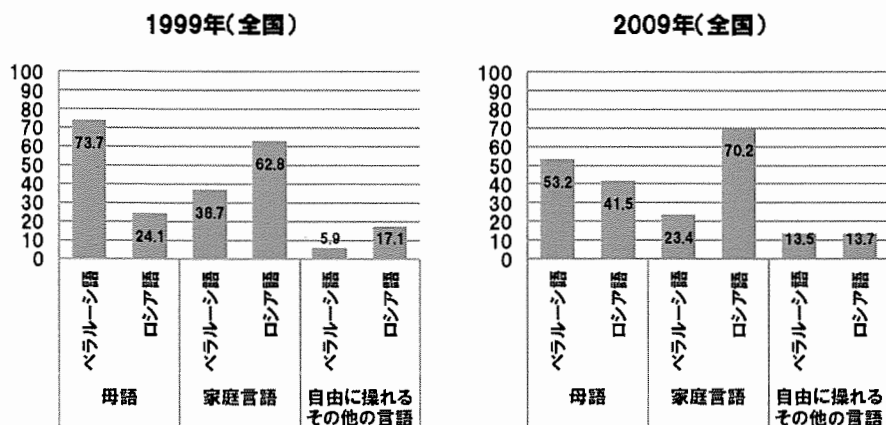
3.3.独立後のベラルーシ共和国の言語状況

本節では、独立後のベラルーシ共和国の言語状況を国民の母語意識（「母語」）及び家庭での使用言語（「家庭言語」）、第二言語（「自由に操れるその他の言語」）の観点から分析する。なお、今回の分析ではベラルーシ共和国で共に国家語とされているベラルーシ語とロシア語の2言語に特に注目して分析を行う。

3.3.1.ベラルーシ共和国全体の言語状況

独立後のベラルーシ共和国全体の言語状況を「母語」「家庭言語」「自由に操れるその他の言語」の3点から整理すると以下のグラフのようになる。グラフでは各調査年の全人口を100とし、そのうちのどれくらいの国民がベラルーシ語及びロシア語を「母語」「家庭言語」「自由に操れるその他の言語」と見なしていたかを割合で示している。

図2 1999年と2009年の言語状況の比較（単位：％）⁴¹

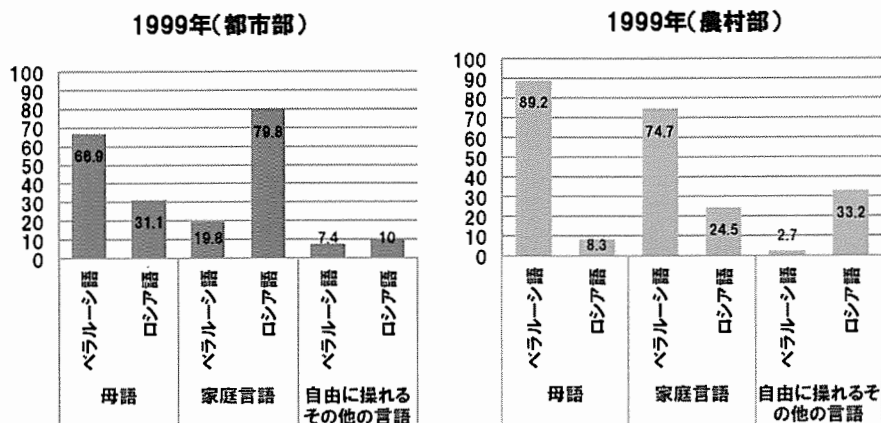
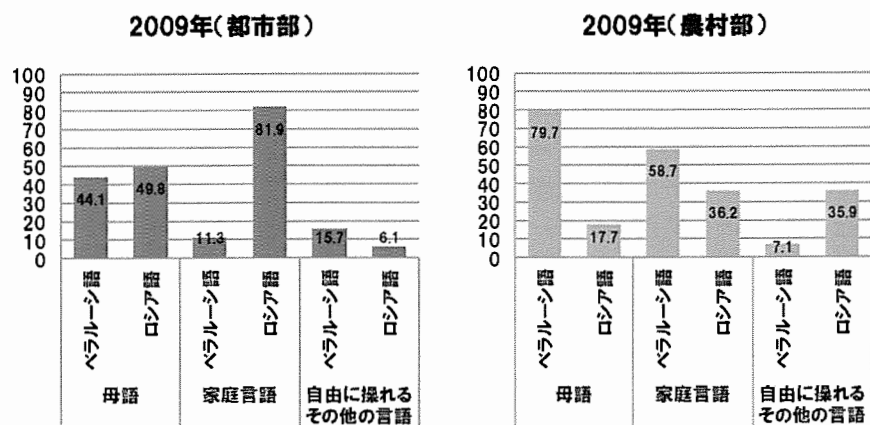


まず、ベラルーシ共和国の言語状況の基本的な特徴として、国民が「母語」と意識している言語と実際に日常生活で使用していると考えている「家庭言語」の状況が乖離しているという点が上げられる。すなわちベラルーシの国民は、「あなたの「母語」は何か？」と問われればベラルーシ語であると答える割合が高いが、「普段家庭で使用する言語は何か？」と問われると、逆にロシア語を上げる割合が高い。つまりベラルーシ共和国においてベラルーシ語は国民の日常のコミュニケーションを媒介するという機能を十分に果たしていないと考えられる。これは1999年の国勢調査のデータを分析した服部(2004a)も指摘している点だが⁴²、2009年のデータにおいてもこの特徴は確認できる。ただし、2009年は1999年と比べて「母語」の項目においてベラルーシ語を上げる国民が特に大きく減少し、代わりにロシア語を上げる国民の割合が増えたため、国民の母語意識は両言語が互角の割合になりつつある。また、1999年から2009年にかけては、「家庭言語」の項目においてもベラルーシ語を挙げる国民の割合が減少し、代わりにロシア語を上げる国民の割合が増えている。唯一「自由に操れるその他の言語」という項目でベラルーシ語を挙げる国民の割合がやや上昇しているが、これはむしろ、国民の言語意識の面でベラルーシ語が「母語」や「家庭言語」という主要な言語の地位から「その他」扱いの第二言語の地位に落ちつつある徴候であると解釈するのが妥当であろう。

3.3.2.都市・農村別言語状況

次に都市部と農村部の言語状況を比較する。都市部と農村部の言語状況に関しては、服部(2002)(2004a)が1999年の国勢調査のデータを分析し「都市部ではロシア語化が相当程度進展しているのに対し、農村部ではベラルーシ語が比較的保たれている」と指摘している。今回の分析ではそうした都市部と農村部の特徴が最新の2009年のデータにも見られるのかという点に加え、ここ10年間にどのような変化が起きたのかという点を注意深く検討する。

1999年、2009年それぞれの調査年における都市部と農村部の言語状況は図3、図4の通りである。グラフでは当該調査年の都市部なら都市部の全人口、農村部なら農村部の全人口を100としている。

図3 1999年における都市部と農村部の言語状況の比較(単位:%)⁴³図4 2009年における都市部と農村部の言語状況の比較(単位:%)⁴⁴

まず「母語」と「家庭言語」の項目を見ると、服部の指摘した都市部はロシア語化している一方で農村部では比較的ベラルーシ語が保たれているという特徴が2009年のデータにも確認できる。もちろん、先に述べたようにこれらの数字は自己回答の結果であるため、より正確には、農村部は都市部よりもベラルーシ語を「母語」と「家庭言語」とであると意識している人々の割合が高いと言うことを意味している。だが、農村部でベラルーシ語を主要言語だとみなす意識が保持されているとはいっても、ベラルーシ共和国の都市部と農村部の人口比は、1999年の時点で都市部：農村部＝69：31(%)、2009年の時点では都市部：農村部＝74：26(%)であり、農村部はベラルーシ共和国全体の言語状況にそれほど大きな影響力を持っていないと考えられる。

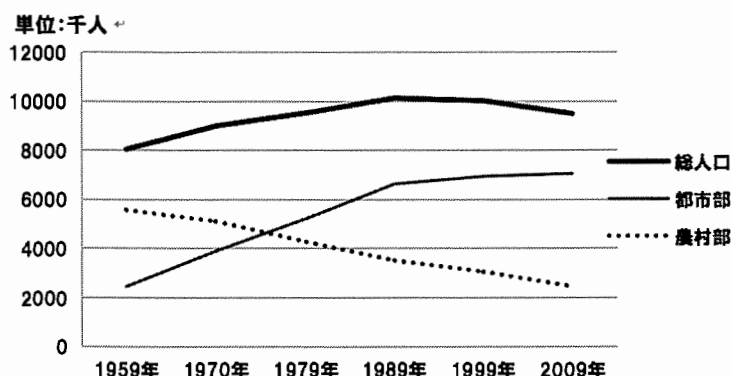
またグラフからは、1999年～2009年にかけての10年の間に都市部と農村部の両方で「母語」及び「家庭言語」の両項目においてベラルーシ語を挙げる住民の割合が減少し、代わりにロシア語を上げる住民の割合が増加していることが見て取れる。さらにベラルーシ語がこうして「母語」や「家庭言語」の地位を追われているのに対応して「自由に操れるその他の

言語」の項目では農村部においても都市部においてもベラルーシ語を上げる住民の割合が増加している。こうした10年間の変化の意味するところは、ロシア語が優勢であった都市部では一層のロシア語化が進行し、ベラルーシ語が比較的保持されているとされてきた農村部でもベラルーシ語の衰退とロシア語化が進行しつつあるということだろう。

これらに加えて、ベラルーシ語を窮地に追い込んでいくのが止まらない農村部の人口減少と都市部の人口増加である。ベラルーシにおける都市部と農村部の人口比の推移は図5に示す通りであり、ベラルーシ語地域である農村部の人口減少とロシア語地域である都市部の人口増加は1959年～2009年に至るまで一貫して続いていることがわかる。もし今後も農村部の人口が減少し続けられれば、ベラルーシ語を主要言語とみなす人口はますます減少していくであろうことは想像に難くない。

このようにベラルーシ語は農村部で辛うじて保持されてはいるものの、そもそもベラルーシの全人口に占める農村人口の比率が低いことに加え、現在その農村部自体がロシア語化と人口減少に晒されておりいわば三重の苦境に立たされているという厳しい状況下にあるのである。

図5 ベラルーシにおける都市部と農村部の人口比の変化⁴⁵



3.3.3.地域別言語状況

次に、ベラルーシ共和国の言語状況にどのような地域差が存在するのかという点を国勢調査のデータから検証する。ベラルーシは、東にロシア、西にポーランドという地政学的な条件、かつてポーランドの支配を受け、後に帝政ロシア・ソ連に組み込まれたという歴史的経緯、民族語がかつての支配言語であるロシア語と同じ東スラヴ語に属しているという言語学的特徴と言った点で隣国ウクライナとよく似た環境にある。ウクライナは東西で言語状況に顕著な地域差があることで知られている⁴⁶。1999年の国勢調査のデータを分析した服部(2002)は、ベラルーシにおける言語状況の地域差は、隣国ウクライナにみられるような極端なものではないとしつつ、敢えて分類すれば、ブレスト州・ヴィテプスク州・モギリョフ州・ゴメリ州はロシア語化が進行しているのに対し、グロドノ州とミンスク州においてはベラルーシ語が相対的に保たれているとしている。今回の分析ではそうした地域毎の特徴が2009年のデータにも見られるのか、1999年からの10年間でどのような変化が生じたのかという点を検証する。

図6 ベラルーシ共和国の行政区分⁴⁷

まず、データ分析に先立ち各地域の背景情報を確認しておく。ベラルーシ共和国の行政区分及びその位置関係は図6のとおりである。東部にはロシアと国境を接するヴィテブスク州、モギリョフ州、ゴメリ州の3州がある。また西部には、ポーランドと国境を接するグロドノ州、ブレスト州の2州がある。これら東部3州、西部2州に加えてさらに中央にミンスク州が位置し、そのミンスク州の中央に首都のミンスク市が位置する。首都ミンスク市は国内で最も人口の多い地域であり、その人口規模は国内のどの州よりも上である。また、どの州においても農村部よりも都市部の人口の方が多いが、比較的農村部の人口が多いのがミンスク州、次いでブレスト州である。首都のミンスク市は分類上その地域全体が都市部に属す地域である。

以上を念頭に置きながら、各地域の住民の母語意識と家庭言語から各地域の言語状況をみていく。各地域の言語状況は図7、8の通りである。グラフではそれぞれの地域の全人口を100とし、そのうちどれくらいの割合の住民が何語を「母語」と「家庭言語」と見なしているかを示している。

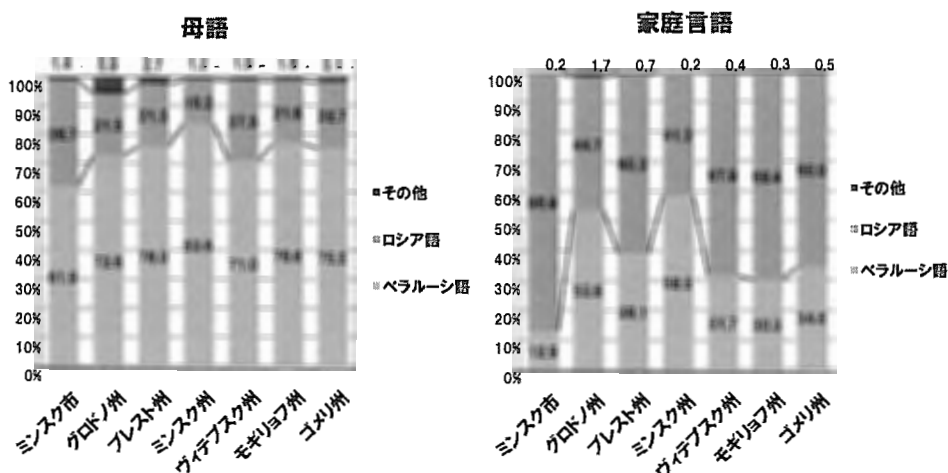
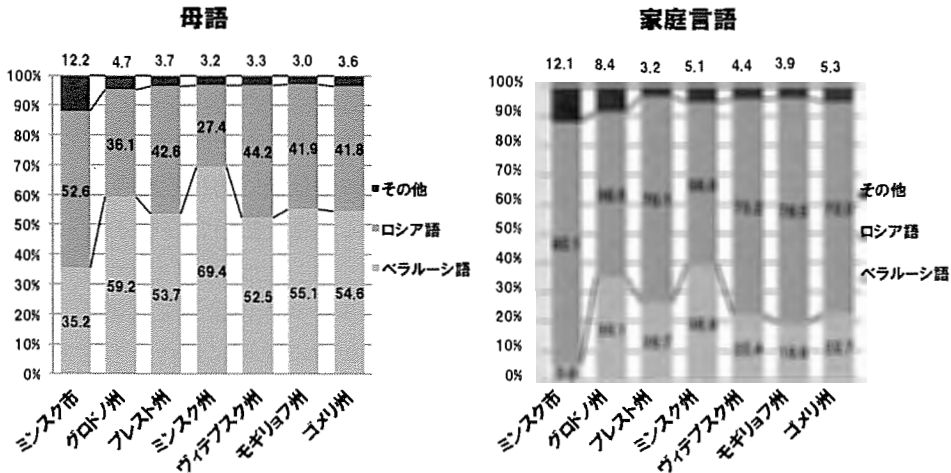
図7 1999年における地域別の言語状況⁴⁸

図 8 2009 年における地域別言語状況⁴⁹



まず、1999 年のデータ分析において服部の指摘した、ブレスト州・ヴィテブスク州・モギリョフ州・ゴメリ州はロシア語化が進行しているのに対し、グロドノ州とミンスク州においてはベラルーシ語が相対的に保たれているという特徴は 2009 年のデータにも確認できる。また、地域差は無いわけではないもののさほど明確ではないという印象は 2009 年の状況にも感じられる。このグラフから明確な地域差として見えてくるのはそうした州毎の差異よりも、首都ミンスクが特に顕著にロシア語化されているという点である。もちろん、都市部に加えベラルーシ語が比較的保持されている農村部も含んだ各州のデータと地域全体が都市部に分類される首都ミンスクを比べればそうした差が出るのは当然であるが、人口規模という点では各州と互角（むしろどの州よりも上である）であり、国の政治経済の中核である首都ミンスクが国内でも特にロシア語が優勢な地域であるという点は注目に値する。

さらにグラフからは 1999 年～2009 年の 10 年間の変化として、どの地域においても、「母語」「家庭言語」の両項目でベラルーシ語を上げる住民の割合が減少している点を指摘しておかねばならない。つまり比較的ベラルーシ語が維持されてきたとされるミンスク州とグロドノ州でさえもベラルーシ語の衰退は進行しつつあることが伺えるのである。

4. おわりに

本稿では危機言語としてのベラルーシ語に焦点を当て、UNESCO の危機言語認定におけるベラルーシ語の評価付けを確認し、さらに国勢調査のデータ分析を通じてベラルーシ語がベラルーシ共和国においていかに危機的な状況に立たされているか明らかにすることを目的としてきた。

2. に見たように、ベラルーシ語は現在 UNESCO によって「危うい状況にある (Vulnerable)」という評価付けで危機言語認定を受けている。一独立国の基幹民族語であり国家語という高い法的地位まで与えられている言語が国際的に危機言語と認定されているこの状況は、旧ソ連圏の他の独立国の国家語にはみられない。それどころか旧ソ連圏という文脈で言うならば、むしろこうした状況はロシア連邦内の構成共和国に近い状況であるとさえいえることが今回の検証からは明らかになった。ベラルーシ語は確かに独立国家の国家語という地位にあるも

のその地位は事実上極度に形骸化しているとみてよいだろう。

3以降では、国勢調査という限られたデータからではあるが、ベラルーシの言語状況の概観を試みた。3.1で確認したように、ソ連時代とそれに引き続く独立後のベラルーシの国勢調査のデータは注意深く考察せねばならない点がいくつかあり、その数字をそのまま実際の言語状況を表すものと解することはできない。しかし1.2で述べたように国勢調査はベラルーシ共和国の国民全員を対象に行われた調査であり、国民の言語意識に関して最も包括的な情報を与えてくれる貴重な資料であると考え、データの扱いに注意を払いつつも分析・考察を行った。

まず3.2で明らかとなったように、ベラルーシ語はベラルーシ人によって次第に「母語」と見なされなくなりつつあり、ここ10年ほどの間にそれが特に急速に進行してきている。また3.3.1で見てきたように、ベラルーシ国民は「母語」は何かという問いに対してはそれでもベラルーシ語を上げる割合が比較的高いものの、普段家庭で使用する言語を問われてベラルーシ語を上げる国民は少数で1999年の段階では全人口の36.7%、2009年には23.4%にまでその割合が下がっている。こうした状況からはベラルーシ語がベラルーシ民族のアイデンティティを体現するという象徴的な機能も、国民の日常コミュニケーションを媒介するという実用的な機能も担えなくなりつつあるという事実の一端が垣間見られたと言えるだろう。

だが、3.3.2で見てきたようにベラルーシ国内でも農村部においては、ベラルーシ語を「母語」として意識し、実際のコミュニケーションの主要言語だと考える人々が多く残っている。ただし、その農村部の人口がベラルーシ全体に占める割合は低く(2009年時点で26%)、人口もここ50年一貫して減少し続けていること、農村部自体の内部でベラルーシ語の衰退とロシア語化がじわじわと進行していることもデータからは明らかとなった。こうした農村部が今後ベラルーシ語の未来を主体的に担いうるのかは前途多難であると言わざるをえない。

また、3.3.3で見てきたように首都ミンスクを除けばベラルーシ共和国の言語状況に目立った地域差は見られない。それでも相対的に見れば中央のミンスク州および西部のグロドノ州では、母語意識と家庭言語の2点においてややベラルーシ語が勢力を保っているが、両州の内部ではここ10年の間にやはりベラルーシ語の衰退とロシア語化が進行している。地域差という点で目立つのはむしろ首都ミンスクの住民の言語意識が極度にロシア語化されているという点だろう。首都ミンスクはベラルーシ共和国の政治・経済の中心であることは言うまでもないが、人口規模という点でも国内では群を抜いており、一都市ながらどの州よりも大きな人口を抱えている。社会的な影響力の発信地である首都ミンスクが住民の言語意識において国内で最もロシア語化されている一方で、社会的影響力に対し受動的にならざるを得ない農村部の農民の言語意識にベラルーシ語が辛うじて生き残っているというこの構図からはベラルーシ語が置かれている危機的な状況がいかに構造的な困難を抱えているかが見えてくる。

以上が本稿により明らかとなったベラルーシ共和国の言語状況の一側面である。繰り返しになるが、最初に述べたように今回検討した国勢調査のデータが映し出すのはベラルーシの言語状況はほんの一端であり、ベラルーシの言語状況をより詳細に捉えるためには今後さらに教育や出版、マスメディアといったより広範なデータを分析していくことは言うまでもな

く、アンケートやインタビューなどの独自の調査によって国民の実際の言語使用状況や言語意識を明らかにしていくことが必要であろう。しかし、今回検討した限られたデータからもベラルーシ語の置かれている危機的な状況は明らかであり、UNESCO がベラルーシ語に与えた「危うい状況にある (Vulnerable)」という評価付け以上にベラルーシ語はその保持が困難な状況に置かれているといえるのではないだろうか。

註

1. Endangered languageの訳語。絶滅の危機に瀕した言語。
2. 大平1992. p.118
3. Государственный язык, state languageの訳語。旧ソ連地域の国家語概念に関しては小田桐(2011)が詳しい。
4. ベラルーシ共和国憲法(Канстытуцыя Рэспублікі Беларусь)第17条およびベラルーシ共和国言語法(Закон Рэспублікі Беларусь 26 студзеня 1990 г. № 3094-XI Аб мовах у Рэспубліцы Беларусь)第2条。
5. 2009年国勢調査。
6. ベラルーシ共和国言語法第2条。
7. ロシア連邦外務省2006. p.41, 43
8. ロシア連邦外務省2006. pp.31-33, 38-40, 57-59
9. ベラルーシ共和国でも独立直後の1990年代前半は他の旧ソ連諸国と同じく基幹民族語(ベラルーシ語)を唯一の国家語と定めていたが、1995年に国民投票が実施された結果、有権者の83%が賛成票を投じ、ロシア語にも国家語の地位が付与された (Коряков 2002. С.47, J. J. Smolicz, R. Radzik. 2004. p.518, 服部2004a. p. 21, 山本2005. p. 227)。
10. 第2次世界大戦以前にもロシア帝政末期の1897年、およびソ連時代の1926年、1939年にも国勢調査が実施されているが、ベラルーシ共和国の現在の国境が画定したのが1945年であるため(服部2004b. p.45)、今回は現在のベラルーシの領域における言語状況を通時的に考察することに重点を置き、第2次世界大戦以降の国勢調査のデータを参照することとした。
11. また国勢調査をはじめとする公式統計は、設問方式や回答の選択肢等が恣意的に設定されていると批判されることがしばしばある。しかし、塩川(2004. p.4)はソ連時代の民族区分や言語区分に関する公式統計を参照するにあたり、「公式統計における区分は、いかに恣意性をはらむにせよ、繰り返し使用されることによって当事者の意に刻印を残し、そのことによって一種の実体性を獲得する以上、それは無視しがたい重みをもつ」として、批判的考慮を加えつつ慎重に扱う必要はあるものの、重要資料であるということを述べている。
12. Stephen A. Wurme. ed. 1996., p.17, 25に基づき筆者作成。
13. Stephen A. Wurme. ed. 2001., p.53に基づき筆者作成。
14. Christopher Moseley. ed. 2010., pp.11-12に基づき筆者作成。
15. カラチャイ・チェルケス共和国の言語法ではチェルケス語という言語名で国家語と定められている。
16. カラチャイ・チェルケス共和国の言語法ではカラチャイ語という言語名で国家語と定められている。
17. モルドヴィア語の方言の1つ。モルドヴィア語はモクシャ語とエルジャ語の2大方言に分かれるがモルドヴィア共和国の言語法では単にモルドヴィア語という表記で国家語と定められている。
18. マリ・エル共和国の言語法では牧地マリ語という言語名で国家語と定められている。

19. アルタイ共和国の言語法では南北方言には言及されず、単にアルタイ語という表記で国家語と定められている。
20. 註17を参照。
21. 註19を参照。
22. マリ・エル共和国の言語法では山地マリ語という言語名で国家語と定められている。
23. ベラルーシ共和国以外の国に関しては以下に示すリソースから各国の憲法を参照し筆者作成。(アゼルバイジャン共和国：<http://ru.president.az/azerbaijan/constitution>, アルメニア共和国：<http://www.parliament.am/parliament.php?id=constitution&lang=rus>, ウクライナ：<http://www.ccu.gov.ua/en/doccatalog/list;jsessionid=9DCEF0D91ECB59A61213104F53B72F44?currDir=12083>, ウズベキスタン共和国：<http://www.gov.uz/en/constitution/>, エストニア共和国：<http://www.president.ee/en/republic-of-estonia/the-constitution/index.html>, カザフスタン共和国：<http://www.constcouncil.kz/eng/norpb/constrk/#section1>, キルギス共和国：<http://pp-mfa.kg/pravovayabase/48-konstituciya-kyrgyzskoy-respubliki.html>, タジキスタン共和国：<http://www.president.tj/rus/konstitutsiya.htm>, トルクメニスタン共和国：http://www.turkmenistan.gov.tm/_ru/laws/?laws=01dw, モルドヴァ共和国：<http://www.prm.md/const.php?lang=rus>, ラトヴィア共和国：<http://www.saeima.lv/en/legislation/constitution/>, リトアニア共和国：<http://www3.lrs.lt/home/Konstitucija/Constitution.htm>, ロシア連邦：<http://constitution.kremlin.ru/>, いずれも2012年8月16日閲覧)
24. ロシア連邦法務省HP(http://zakon.scli.ru/ru/legal_texts/index.php、2012年7月12日閲覧)より、各共和国の言語法または憲法を参照し筆者作成。
25. Christopher Moseley ed. 2010. p.37
26. 例外的なのはカバルダ・バルカル共和国、カレリア共和国、ダゲスタン共和国である。カバルダ・バルカル共和国は具体的な言語名は明記せず、国民の言語を全て国家語とするとしている。カレリア共和国は民族語を国家語として定めておらずロシア語のみを国家語としている。ダゲスタン共和国はロシア語を具体的に国家語として定めつつ、加えて国民の言語をすべて国家語として定めている。
27. 唯一危機的な状況にないとされているのはタタルスタン共和国の国家語となっているタタール語のみである(Christopher Moseley ed. 2010. p.42)
28. ソ連時代の「第二言語」のデータに関しては紙幅の都合上今回は検討しない。
29. 渋谷2007. p.176
30. ただし2009年の国勢調査に関しては、ベラルーシ共和国国家統計委員会のHP(<http://www.belstat.gov.by/>)で公開されている集計データにおいて民族と言語に関して複数回答した人数が掲載されている。このため複数回答が可能であったことが何えなくもないが、その数が極端に少ないことから、おそらく基本的には民族に関しても言語に関しても回答者は1つを選んで回答したものと思われる。同HP上で公開されているアンケート用紙の質問項目とその選択肢を見ても最初から複数回答が想定されていたとは考えにくい。
31. Система доступа к итоговым данным переписи населения Республики Беларусь 2009 года через сеть Интернет(<http://belstat.gov.by/homep/ru/perepic/2009/database.php>、2012年7月9日閲覧)。この「その他」の意味づけに関しては1999年の調査においても同じ想定がなされていたと考えられる。服部(2002)(2004a)は1999年国勢調査の言語に関する「母語」「家庭言語」「自由に操れるその他の言語」という3つの質問項目のうち「家庭言語」と「自由に操れるその他の言語」に関する質問項目を実際の使用状況・及び能力に関する設問として一括りにし、母語意識に関する設問と切り離されて問われていると強調している。そして暗に「その他」の意味を「家庭言語以外」と解釈して、ある言語を自由に操れる国民の総数を得るためには「家庭言語」と「自由に操れる

その他の言語」の数値を合計すればよいとして議論を展開しているが、これはやや拡大解釈ではないかと筆者は考える。筆者が1999年の国勢調査の調査方法に関する説明と調査結果の提示の仕方を見た限りでは「母語」「家庭言語」「自由に操れるその他の言語」という質問項目は3つが等置されており、「その他」の意味を素直に受け取れば「母語と家庭言語以外」と解釈されるはずであると考え。つまり、少なくとも調査者側には、「母語」に挙げた言語に関してもその言語を操れることは想定されていたのであって、ある言語を自由に操れる国民の総数を得るためには「家庭言語」と「自由に操れるその他の言語」の数値を単純に合計すればよいという解釈には筆者は首肯できない。

32. 渋谷2007. pp.177-178

33. Dominique Arel 2002. p.222

34. 渋谷(2007)によるВ.И.Козлов. Национальности СССР. Москва, 1975, С.205からの引用

35. 本図を作成するにあたって以下の統計資料を参照した：[1] С.124-125., [2] С.192., [3] С.108-109., [4] С.214-215., [5] С.319-320

36. もちろんベラルーシ語とロシア語以外を母語だと見なすベラルーシ人も存在したが、割合としては非常に低く、ベラルーシ語とロシア語に関する割合を合計すればどの年もほぼ100%に近い値となることから、今回はこの二言語に限って検討を行った。

37. ベラルーシ共和国独立直後の1990年代前半にベラルーシ共和国で実施された、ベラルーシ語及びベラルーシ文化の奨励政策。1995年のロシア語国家語化を機に事実上打ち切られていった。

38. この点は、ベラルーシ人が「母語」の意味を現在どう捉えているのかというこれ自体が大きなテーマであるため、今後より詳細な調査を行い、稿を改めて明らかにするつもりである。

39. Мечковская 1994.с.308

40. 服部2004a. p.131

41. 本図を作成するにあたって以下の統計資料を参照した：[4] С.214-215., [5] С.400-401.

42. 服部2004a. p.134

43. 本図を作成するにあたって以下の統計資料を参照した：[4] С.216-219.

44. 本図を作成するにあたって以下の統計資料を参照した：[5] С.400, 414.

45. 本図を作成するにあたって以下の統計資料を参照した：[5] С.8, 26, 40.

46. ウクライナにおいては西部がウクライナ語優勢、東部がロシア語優勢という明確な東西差があり(芳之内2008. p.48, 52)、しばしばこうした東西差が国を2分するような議論を引き起こしている。

47. Т. Р. Рамза 2010. 裏表紙見返し。

48. 本図を作成するにあたって以下の統計資料を参照した：[4] С.262-280, 306-324.

49. 本図を作成するにあたって以下の統計資料を参照した：[5] С.334-340, 356-362.

統計資料

[1] Итоги Всесоюзной переписи населения 1959 года: Белорусская ССР/ Центральное статистическое управление при Совете Министров СССР. Москва, 1963.

[2] Итоги Всесоюзной переписи населения 1970 года: Том IV: Национальный состав населения СССР/Центральное статистическое управление при Совете Министров СССР. Москва, 1973.

[3] Численность и состав населения СССР: По данным Всесоюзной переписи населения 1979г. Статистический сборник/ Центральное статистическое управление СССР. Москва, 1985.

[4] Итоги переписи населения Республики Беларусь 1999 года: Том 1: Национальный состав населения Республики Беларусь и распространенность языков, Статистический сборник/

Министерство статистики и анализа Республики Беларусь. Минск, 2001.

[5] Перепись населения 2009: Том III: Национальный состав населения Республики Беларусь, Статистический сборник/ Национальный статистический комитет Республики Беларусь. Минск, 2011.(<http://belstat.gov.by/homep/ru/perepic/2009/itogi1.php>, 2012年7月9日閲覧)

[6] Система доступа к итоговым данным переписи населения Республики Беларусь 2009 года через сеть Интернет(<http://belstat.gov.by/homep/ru/perepic/2009/database.php>, 2012年7月9日閲覧)

参考文献

大平陽一 1992.「白ロシア語」 亀井孝・河野六郎・千野栄一編著『言語学大辞典 第3巻 世界言語編(下-1) む-ほ』三省堂, 118-123

小田桐奈美 2011.「旧ソ連地域における国家語概念に関する一考察」『日本スラヴ人文学会誌スラヴィアーナ』第2号, 47-68

黒田龍之助 1999.「似ているが故の悲劇：ベラルーシ言語文化事情」中澤英彦編『ポストソヴィエト期の社会と文化受容について：スラブ、とくにウクライナ、ベラルーシ地域における』1998年度財団法人サントリー文化財団「人文科学、社会科学に関する研究助成」研究報告, 13-36.

塩川信明 2004.『民族と言語：多民族国家ソ連の興亡Ⅰ』岩波書店

渋谷謙次郎 2007.「『母語』と統計：旧ソ連・ロシアにおける『母語』調査の行方」『ことばと社会』第10号, 三元社, 175-207.

服部倫卓 2002.「現代ベラルーシの言語状況に関するデータの検証」ウクライナ語・文化研究会『オスノーヴァ』第1号, 89-125.

服部倫卓 2004a.『不思議の国ベラルーシ』岩波書店

服部倫卓 2004b.『歴史の狭間のベラルーシ』ユーラシアブックレットNo.68, 東洋書店

山本靖子 2005.「ベラルーシの言語事情：標準語の問題を中心に」スラヴィアーナ編集委員会/東京外国語大学スラブ系言語・文化研究会『Славяна』20, 223-229.

芳之内雄二 2008.「ウクライナの現代言語状況と言語問題」『北九州市立大学文学部紀要』74, 47-61

ロシア連邦外務省, 中澤英彦・白山利信訳編 2006.『世界のロシア語2003』(上巻) 東京外国語大学語学研究所・筑波大学外国語センター

B. ナハイロ・V. スヴォボダ著, 田中克彦監修, 高尾千津子・土屋礼子訳 1992.『ソ連邦民族・言語問題の全史』明石書店

Christopher Moseley. ed., Alexandre Nicolas. cartographer 2010. *Atlas of the world's languages in danger*. 3rd ed., entirely rev., enl. and updated, Paris: UNESCO Publishing.

Dingley, James. 1989. "Ukrainian and Belorussian – a Testing Ground." Kirkwood, W. ed. *Language Planning in the Soviet Union*. London: Macmillan.

Dominique Arel 2002. "Interpreting "Nationality" and "Language" in the 2001 Ukrainian Census." *Post-Soviet Affairs*, No.3, 213-249.

Fause, Gary C. 2000. *The languages of the former Soviet Republics; Their History and Development*. Lanham: University Press of America.

Goujon, Alexandra. 1999. "Language, Nationalism and Populism in Belarus." *Nationalities Papers*, Vol.27, No.4, 661-677.

Ioffe, Grigory. 2003. "Understanding Belarus: Questions of Language." *Europe-Asia Studies*, Vol.55, No.7, 1009-1047.

J. J. Smolicz, R. Radzik. 2004. "Belarusian as an endangered language: can the mother tongue of an

- independent state be made to die?" *International Journal of Education Development* 24(5), 511-528.
- Steven L. Guthier 1977(a). "The Belorussians : National Identification and Assimilation, 1897-1970" Part I, *Soviet Studies*, vol.29, no.1, 37-61.
- Steven L. Guthier, 1977(b). "The Belorussians : National Identification and Assimilation, 1897-1970" Part II, *Soviet Studies*, vol.29, no.2, 270-283.
- Stephen A. Wurme. ed. , Theo Baumann. cartographer 1996. *Atlas of the world's languages in danger of disappearing.*, Paris: UNESCO Publishing/ Canberra: Pacific Linguistics.
- Stephen A. Wurme. ed., Ian Heyward. cartographer 2001. *Atlas of the world's languages in danger of disappearing.* 2nd ed., rev., enl. and updated, Paris: UNESCO Publishing.
- Г.Хентшель, Б.Киттель. 2011. "Языковая ситуация в Беларуси: мнение белорусов о распространённости языков в стране." *Социология* №4, 2011. Минск, 62-77
- И.Э.Федотова, А.В.Санникова 2010. "Белорусско-русское двуязычие: статус и место русского языка в Республике Беларусь." *Функционирование русского языка в двуязычном образовательном пространстве: Материалы международной конференции, 8-11 декабря 2010 г.* Санкт-Петербург: Златоуст, 2010, 189-193
- Закон Рэспублікі Беларусь 26 студзеня 1990 г. № 3094-XI Аб мовах у Рэспубліцы Беларусь (<http://pravo.by/main.aspx?guid=3871&p0=v19003094&p2={NRPA}>}, 2012年6月14日閲覧)
- Канстытуцыя Рэспублікі Беларусь (<http://www.president.gov.by/by/press10669.html>, 2012年8月16日閲覧)
- Коряков Ю.Б. 2002. "Языковая ситуация в Белоруссии и типология языковых ситуаций." Москва. (http://lingvarium.org/ling_geo/belarus/belorus.pdf, 2012年7月13日閲覧)
- Мечковская Н.Б. 1992. "Языковая ситуация в Беларуси: Этические ноллизии двуязычия." *Russian Linguistics* No.18, 299-322
- Т. Р. Рамза 2010. *Беларуская мова? З задавальненнем! Для замежных навучэнцаў.* Мінск, 2010.